

第2章

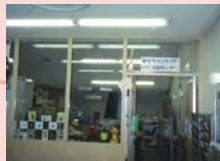
ボランティア・NPO 活動センターの設立から現在に至るまで

(注) 所属・役職等は当時のものを示す。

第2章 ボランティア・NPO 活動センターの設立から現在に至るまで

●ボランティア・NPO 活動センターの遷移と主な社会情勢

	センターの遷移	社会情勢
1995		阪神淡路大震災。
1996		大学就職率過去最低。
1997	1995 年の阪神淡路大震災後、学生のボランティア活動を支援する動きが活発化。 教員有志が「龍谷ボランティア・ネットワーク」設立企画書を大学に提出。	ナホトカ号事件(約 27 万人がボランティアで重油回収)。 COP3 (京都市で開催)。
1998		長野オリンピック。 特定非営利活動法人促進法交付。
1999	第 4 次長期計画で、ボランティアセンター設置の検討を開始。	市民活動と行政の協働が全国の自治体で叫ばれるようになる。
2000		介護保険制度スタート。
▼始動期		
2001	ボランティア・NPO 活動センター設立、 深草キャンパス紫光館 1 階に事務室を構える。	ボランティア国際年。 9.11 アメリカ同時多発テロ事件の発生。
2002	瀬田キャンパスで 『ボランティア・市民活動相談会』を開催。	イラク情勢の緊迫化。
2003	ボランティアリーダー育成事業開始。 深草キャンパス 1 号館 1 階にセンター移転。 瀬田キャンパス青志館 2 階談話室にセンター開設。	イラク戦争が始まり、自衛隊イラク派遣。世界各地で爆弾テロ多発。新型肺炎 (SARS) が中国などで流行。
2004	災害ボランティアや募金活動に初めて取り組む。	台風 23 号広い範囲で大雨被害 (台風上陸最多の 10 個)。新潟県中越地震。インドネシア・スマトラ沖地震などの災害多発。
2005		JR 福知山線脱線事故。京都議定書発効。避難準備情報を新設。世界各地でテロ。パキスタン大地震。
▼成長期		
2006	運営体制を見直し、 教員・職員・学生の 3 者協働へ。 瀬田のセンターが現在の場所へ移転。	日本人口が減少に転ずる。「格差社会」が課題に。いじめ自殺が各地で続発。インドネシア・ジャワ島地震。
2007		新潟県中越沖地震。緊急地震速報運用開始。地球温暖化に国際的関心高まる。



	センターの遷移	社会情勢
2008	ボランティアコーディネーターが 両キャンパスとも2名体制に。 ボランティア入門講座がスタート。 ミャンマーと中国の災害募金活動に取り組む。	リーマンショックにより世界的な不況に。日本では年越し派遣村の取り組みがクローズアップ。「ゲリラ豪雨」が流行語に。ミャンマーサイクロン。中国四川省大地震。
2009		民主党政権成立。新型インフルエンザの世界的な感染広がる。
2010	10周年記念事業実施。	普天間基地移設の日米合意。尖閣事件めぐり、中国各地で反日デモ。ハイチ大地震。
▼転換期		
2011	龍谷大学東日本大震災復興支援プロジェクトの事務局となり、以降の復興支援ボランティアやフォーラム運営などを担っていく。	3.11 東日本大震災・原発事故で甚大被害。タイで大洪水。欧州危機深刻化。「アラブの春」で独裁体制崩壊。
2012	深草のセンターが学友会館に移転。	尖閣・竹島で中韓との関係悪化。
2013		アベノミクス始動。「ブラック企業」が流行語になり、働き方改革が進む。フィリピン台風で甚大な被害。
2014	深草和顔館に震災を語り継ぐモニュメントの設置。	御嶽山噴火。広島で土砂災害。「イスラム国」が勢力拡大。ウクライナ危機。エボラ出血熱感染拡大。
2015	ネパール地震募金活動。 福島スタディツアー開始。	安全保障関連法成立。マイナンバー制度のスタート。外国人観光客急増。COP21でパリ協定採択。ネパール地震。
▼近年		
2016	熊本県地震復興支援活動。	熊本地震災害。米大統領広島訪問。障がい者施設で19人殺害。英国がEU離脱決定。
2017	滋賀県スタディツアー開始。	九州北部豪雨。国連が核禁止条約採択。
2018	深草のセンターが7号館に移転。 平成30年7月豪雨災害復興支援活動。	大阪府北部地震。平成30年7月豪雨災害。台風21号。北海道胆振東部地震。
2019		令和に改元。九州南部豪雨や台風5・8・10・15号により、日本列島各地で被害が相次ぐ。
2020	深草のセンターが成就館に移転。	新型コロナウイルスの世界的な感染拡大。令和2年台風10号。令和2年7月豪雨。

第2章 ボランティア・NPO 活動センターの設立から現在に至るまで

ボランティア・NPO 活動センターは、ボランティア活動を共生教育のひとつとして位置づけ、思いやりと責任感のある行動的な人間を育成するとともに、営利を目的としないボランティア活動を通じて相互に学び合うサービスラーニング（社会参加型教育）を実践し、本学の教育研究の新たな発展に貢献すること、また、国内外の高等教育機関、各種のNPO・NGO、浄土真宗本願寺派、地方公共団体等々との交流を深め、学内外における様々なボランティア活動の振興を図ることを目的としています。

この章では、センターの設立から20年間のあゆみをダイジェストにまとめました。各事業のあゆみは第3章に掲載していますので、そちらもぜひご覧ください。

● 始動期 (2001 年度～2005 年度)

【2001 年度】 センター長 中村 尚司 (経済学部教授)

4 月、ボランティア・NPO 活動センターは関係者の様々な協力により設立されました。最初のセンター事務室は深草キャンパスの紫光館 1 階に設置され、初代センター長のもと、センター開設事業『ボランティアとは何か』や 2002 年度からのボランティア人材育成に向けた各種事業（ボランティアコーディネート、学外の中間支援組織との連携、他大学ボランティアセンターの調査、ホームページ（以下、HP）の作成など）を進めることが、センター委員会で決定しました。

また、センター委員の教員による呼びかけで、少人数が学生スタッフとして各自の関心に基づき、地域の NPO・NGO で活動を開始しました。



開設記念パネルディスカッション

【2002 年度】 センター長 大林 稔 (経済学部教授)

事務体制も専任事務職員と専門職のボランティアコーディネーター（以下、CD）が嘱託職員として配置され、体制の確立に力を入れました。

瀬田キャンパスでは、筒井のり子（社会学部助教授）副センター長の呼びかけで開催した『ボランティア・市民活動相談会』をきっかけに学生スタッフが集まり始め、滋賀県の市民活動団体へ活動内容や学生ボランティアの受け入れについてヒアリングをおこないました。そして後期からは、青志館（生協）1 階の入り口横で週 1 回ボランティアの紹介活動を開始しています。

同様に深草でも近畿各地の NGO・NPO を訪問し、学生ボランティアの受け入れに関する情報提供などを依頼した他、学友会館（生協）の相談室で週 3 回ボランティア紹介活動を実施しました。また、ボランティアコーディネートに関する研修や国内合宿など、学生スタッフ向けのプログラムも 2002 年度から少しずつスタートしています。



『ボランティア・市民活動相談会』

【2003 年度】 センター長 石川 両一 (経済学部教授)

両キャンパスとも利便性の高い活動拠点を確保し、徐々に事業内容の拡大・充実を図り始めます。深草キャンパスは 1 号館 1 階へ移転、そして瀬田キャンパスでは青志館 2 階の談話室の一角にセンターが設置されました。これを機に学生スタッフが日常的に寄り集まり、その他の学生も気軽に訪れてボランティアコーディネートをはじめとする各種活動は少しずつ軌道に乗り始めました。活動場所ができたことによって、それぞれのセンターにおいて学生スタッフがシフトを組み毎日実施する体制が可能となったのです。ボランティア企画『みんなでボランティア体験ツアー』や市民活動団体の訪問、写真展、メールマガジンに HP など、学生スタッフの活動は次第に多彩になりました。また、学生スタッフの研修も『ボランティアリーダー育成事業』と位置付けて、海外スタディツアーを含めた本格的なプログラムの下に実施されるようになりました。



深草キャンパスのセンター（1 号館 1 階）

その他にも、学内外の機関と各種セミナーやワークショップを共催したり、瀬田センター設立記念シンポジウムとして、『小さなネパール NGO の大きな挑戦～SOPU の試み～』『地域福祉におけるボランティア・NPO の役割』も開催しています。

【2004年度】 センター長 石川 両一（経済学部教授）

専任事務職員として課長が、深草・瀬田キャンパスに専門職の嘱託職員 CD 各1名が新たに採用され、年を重ねるごとに事務体制も徐々に充実していきました。

一方で、災害が多発した年でもあり、「現地に行って支援活動をしたい」という学生たちが多くセンターへ来室。その熱い想いを受け止めつつ、彼らの情熱と行動力を被災者への意味のある支援として活かすため物資を被災地へ送付したり、現地の動向を見極めながら募金活動や被災地でのボランティア活動を行いました。特に被災地へ赴いた学生らは、緊急支援・生活支援・自立支援など災害ボランティア特有の難しさを感じ、復興支援活動が大きな広がりを持ち始める中で、改めてその在り方が問われた年となりました。

また、瀬田キャンパスの取り組みで長く続いている『大津祭ボランティア』に関わった最初の年であり、本学学生が地域の方とともに祭りを盛り上げました。



台風 23 号ボランティア活動

【2005年度】 センター長 石川 両一（経済学部教授）

両キャンパスに事務系嘱託職員各1名が新たに配置されるとともに、数年継続したいくつかの学生スタッフ企画が始まるなど、事業内容の充実が伺える年となりました。

深草キャンパスでは過年度から続く『みんなでボランティア体験ツアー』において、地域イベントや自主企画で本学学生にボランティア活動の機会を提供しました。中でも2005年度に始まった学生スタッフによるボランティア企画『南宇治中学校部活支援ボランティア』は、以降2008年度まで毎年2回ずつ継続して実施しています。野宿者支援に取り組む『ビッグイシュー講演会』もこの年に始まり、同じく2008年度まで毎年継続しました。

また、瀬田キャンパスでは地域イベントでの活動として、大津市にある丸屋町商店街の『丸屋町夜市』への協力が始まった年でもあり、2014年度まで継続しました。



雑誌『Big Issue』路上販売協力の様子

成長期（2006年度～2010年度）

【2006年度】 センター長 鍋島 直樹（法学部教授）

4月にセンター長、専任事務職員、CDが大幅に入れ替わり、運営体制の見直しを行いました。全学生スタッフ、正副センター長、CDを含めた事務局が構成員となるボランティア・NPO活動センター会議（通称ボラセン会議）がセンター委員会のもとに設置され、学生・教員・職員の3者が意見を出し合いながら事業を作り上げていくことになりました。

具体的な事業内容については、講座・国内研修・海外研修といった『ボランティアリーダー育成事業』をそれまで学生スタッフの育成目的で実施していましたが、その中の海外研修を独立させて『海外体験学習プログラム』と位置付け、全学的に開放しました。対象とするプログラムも学外団体のスタディツアーの中からセンターが推奨するものを取り入れ、2007年度以降の同プログラムの基盤となる年であったと言えるでしょう。その他にも、他大学との共催事業の開催、学生スタッフが各種イベントのボランティアとして協力するなど、単発事業にとどまらない進展が見られた年になりました。

また、学生スタッフの班活動が進み、深草は各自の興味・関心に沿って環境、国際、福祉などのボランティアの分野ごとに編成、一方で瀬田はセンター運営のために広報・掲示板、団体訪問、チラシ整理などの編成にするなど、各キャンパス独自で工夫して取り組んでいきました。

瀬田キャンパスにおいては現在の建物に移転した年にあたり、独立した建物という両キャンパス初めての環境と、内部も職員スペースと学生スタッフの活動スペースが一つの空間になった新たな活動拠点で再スタートしています。



ボラセン会議の様子



瀬田キャンパスのセンター

第2章 ボランティア・NPO 活動センターの設立から現在に至るまで

【2007 年度】 センター長 鍋島 直樹 (法学部教授)

7 月に新潟県中越沖地震が発生。被災地域に実家のある学生が在籍していることや、実家が全壊した卒業生などもいたことから、3 年ぶりに緊急災害支援に取り組みました。センターの学生スタッフを中心となって学内の募金活動で集めた義捐金を柏崎市に寄付した他にも、浄土真宗本願寺派の呼びかけにより、学生スタッフを含む本学学生が復旧活動に関わりました。

一方、学生スタッフ企画では、さまざまな国際協力団体の活動紹介と参加者がワークショップで学ぶ『国際協力コンソーシアム』、2006 年度の海外体験学習プログラムで訪れた地域の関係者による講演会、NGO 相談員によるスタディツアーやワークキャンプの比較検討ポイントについて学ぶ『海外ボランティアセミナー』、『世界がもし 100 人の村だったらワークショップ』など、国際協力に関わるテーマの企画が数多く実施されました。



新潟中越沖地震募金活動



国際協力コンソーシアム

【2008 年度】 センター長 阪口 春彦 (短期大学部教授)

各キャンパスの職員体制が、それまでの嘱託職員 CD1 名+事務系嘱託職員 1 名から嘱託職員 CD2 名ずつとなり、キャンパス間で連携を密に図りながら共通して実施する事業も 2008 年度から進んでいったことが改めて確認できます。

その一つとして、学生スタッフの育成中心だったボランティアリーダー育成事業の講座を、全学向けの入門コース『ボランティア入門講座』と学生スタッフのスキルアップを目指した応用コース『ボランティアリーダー養成講座』に分けて、両キャンパスで実施しました。とりわけ前者では新学生スタッフを含めた本学学生全体を対象にした結果、初の試みでありながら参加者は 60 名にものぼりました。この背景には、より全学的に開かれたセンターを目指して事業計画や運営体制を 2007 年度末から見直してきたことが、大きく作用していると考えられます。

さらに、2008 年度はミャンマーサイクロンや中国四川省大地震などが発生した年でもあり、被災地出身の留学生の声を受けて学内募金活動を両キャンパスで行うなど、国際的な災害支援に対しても取り組んでいます。

一方で「本学学生へのボランティア促進」という点において、具体的な活動の入り口にも位置付けられる学生スタッフのボランティア企画については、彼ら自身で参加人数の殆どを埋めているものが多く、この改善が次年度へ向けての課題となりました。



ボランティア入門講座のボランティア体験



ボランティアリーダー養成講座

【2009 年度】 センター長 阪口 春彦 (短期大学部教授)

従来から課題となっていた「学内外におけるセンターの認知度向上」に向けて、具体的な取り組みが始まったのが 2009 年度です。学内の教職員向けに『ボランティア・NPO 活動センター通信』を発行した他、学生スタッフも学生向けにボランティア情報発信を視野に入れた広報誌『ボラゴン』(深草)・『Volunteer News』(瀬田)を発行するなど、学内での認知度向上に努めました。それに伴い、学生スタッフのボランティア企画も積極的に学内募集が行われるようになっていきます。

また、学生スタッフの育成で重要な位置づけとなる『オリエンテーション合宿』を学生スタッフだけで企画していましたが、CD も関わる実行委員形式で始まっ



学生スタッフ制作の広報誌

た最初の年であり、以降 2019 年度までこの形で毎年続いています。一方で『ボランティアリーダー養成講座』については、ボランティア系サークル所属の学生にも参考となる内容であることから、全学対象で実施するようになりました。

そして地域団体との連携では、深草キャンパスにおいて NPO 法人 JIPPO との協働で 2008 年度末に始めた『伏見区野宿者支援プロジェクト』を本格的に継続実施。全学的に参加者募集を行い、東高瀬川、西高瀬川、山科川の 3 河川で暮らす野宿者への物資支援や聞き取りなどを行いました。瀬田キャンパスでは学内でのボランティア促進企画『Let's ボランティア』が始まった年で、学生スタッフ主体で 2019 年度まで毎年実施しています。



オリエンテーション合宿

【2010 年度】 センター長 古川 秀夫 (国際文化学部教授)

センターにとって大きな節目になる 10 年目を迎え、通常の活動に加えて 3 つの 10 周年記念事業を実施しました。まず 12 月に『10 周年記念講演会・祝賀会』、2 月に日本ボランティアコーディネーター協会との共催で『全国ボランティアコーディネーター研究集会』を実施、そして 10 周年記念誌の刊行です。特に 2 行事の実施・運営にあたっては、学生スタッフが会場周辺で活動展示を行ったり、司会進行をしたり、交流プログラムを運営したりと彼らの活躍が光りました。

また、毎年実施している各種自主事業においても新たな展開として、学生の長期休暇に実施している『海外体験学習プログラム』に加えて『国内ボランティア体験プログラム』（後に『国内体験学習プログラム』と改名）を本学教員の引率下で実施しました。そして 10 周年事業が全て終了した年度末、3 月 11 日に東日本大震災が発生し、卒業式での募金活動を皮切りに一連の復興支援活動へ取り組んでいくことになります。



10 周年事業の展示準備



東日本大震災募金活動 (卒業式)

転換期 (2011 年度～ 2015 年度)

【2011 年度】 センター長 松島 泰勝 (経済学部教授)

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災の復興支援活動に対して大学として取り組むために「学生ボランティア等の被災者・被災地支援検討プロジェクトチーム (以下、PJ)」が組織され、その事務局をセンターが担うことになりました。

2010 年度末の卒業式などから引き続いて 2011 年度入学式での募金活動を皮切りに、復興支援活動のガイダンスや現地で活動した教員による報告会の実施、被災地を支援するために福島や雄勝の物産品を学内で販売、学生を募集して京都からバスで現地に赴く復興支援ボランティアを 5 回、そして復興支援フォーラムや一周忌法要のパネル展なども開催しました。これらは全て PJ で協議をして実施されています。 (『東日本大震災復興支援ボランティア活動報告書』参照)

これら一連のプロジェクトは、職員が『ボランティア入門講座』『海外体験学習プログラム』などの通常事業も行いながら取り組み、学生スタッフも例年の活動や企画を継続しつつ前述の各種復興支援活動に協力しました。そして龍谷祭でも震災に関する啓発展示を実施するなど、東日本大震災の被災地・被災者に対して「何かしたい」という想いで取り組んだことが伺える年となりました。

※ PJ は、2012 年度、2016 年度に名称変更を行ったが活動は継続。



福島物産展



東日本大震災復興支援ボランティア活動

第2章 ボランティア・NPO 活動センターの設立から現在に至るまで

【2012 年度】 センター長 松島 泰勝 (経済学部教授)

2011 年度から引き続いて PJ のもと、『被災地でボランティア活動を行う学生に対する支援金』として学内教職員から支援金を募集したり、ボランティアバスでの復興支援ボランティアを 2 回実施した他、瀬田キャンパスでの夕照コンサートにおいて雄勝の物産品販売や、深草キャンパスで復興支援フォーラムなどを行いました。そして 8 月には京都府南部周辺地域の豪雨災害が発生したため、京都府災害ボランティアセンターの災害ボランティア募集を行い、本学学生が宇治市内で活動しました。

さらに、2010 年度に始めたものの 2011 年度は復興支援のため実施できなかった『国内体験学習プログラム』も再開し、夏季と春季の 2 回実施しています。

学生スタッフのボランティア企画については、瀬田キャンパスでは「福祉」を広くとらえたボランティア企画で活動者を学内募集し、一緒に体験する取り組みを実施しています。深草キャンパスでは地域の各種イベントに学生スタッフがボランティアとして積極的に参加した他、秋には深草のセンターが学友会館に移転し、新しい場所で再スタートを切ることになりました。



宇治豪雨災害ボランティア



福祉企画 ProjectW

【2013 年度】 センター長 筒井 のり子 (社会学部教授)

深草では 2012 年度の移転に伴ってその後の来室者数が激減したことから、学生スタッフが丸となって広報強化に努めたことにより、4 月の来室者が例年の 2 倍というスタートを切ることができました。2012 年度末から 2013 年度前半にかけて 2 名の CD が 5 年の任期満了に伴い交代するなどの体制変化に加え、新たにセンター長の担当科目として、多彩な分野の教員からチェーンレクチャー形式で学べる教養教育科目特別講義『ボランティア・NPO 入門』が、深草キャンパスの前期授業で始まっています。

また、夏期休暇中に発生した台風 18 号によって大学の地元でも災害が起こったことから、センターでは被害状況やボランティアニーズの情報収集、地域の災害ボランティアセンターと連携したボランティア募集などに取り組んでいます。

一方で東日本大震災復興支援については、ボランティアバスでの活動内容が地域行事や住民の交流企画の支援へと変化していった年でもあります。本年から『雄勝灯籠流し』への協力が始まり、参加学生が地元の方や支援のプロから話を聴く機会を設けるプログラムを組み立てました。復興支援フォーラムも 3 年連続で開催しています。



台風 18 号ボランティア活動



雄勝灯籠流し

【2014 年度】 センター長 筒井 のり子 (社会学部教授)

学生スタッフの発案により、センターの取り組みやボランティア募集のため Twitter と Facebook での情報発信を始め、本学学生以外にも広範囲の人々にセンターの取り組みを発信することが可能となりました。そして日本ボランティアコーディネーター協会との共催で、『ボランティアコーディネーション力 3 級検定』がスタート。以降、学生スタッフを中心に毎年関心のある龍大生がチャレンジしています。

平成 26 年 8 月豪雨災害の際は、社会福祉協議会を中心に他団体や他大学等と連絡をとったり福知山市へ視察に向かうなど、被災地域でのボランティア受入状況の情報収集とボランティア希望学生への情報提供を行っています。

また、東日本大震災復興支援関連では例年のボランティアバスでの活動の他、



Oh!ガッツ!雄勝♪

活動学生有志による企画『Oh!ガッツ!雄勝♪』を開催したり、びわこ文化公園で開催された「防災・減災そなえパークの日」にブース出展を行いました。また、過去に参加した学生が活動中に洗浄した雄勝の硯石スレートが『震災を語り継ぐモニュメント』として深草キャンパス和顔館に設置されました。

さらには、深草の学生スタッフ企画として続く深草児童館でのボランティア『サマーフェスティバル』が始まった年であり、瀬田では継続企画の『Let's ボランティア』の実施回数を増やしたり、その他にも、国際社会への視野を広げ、貧困問題に対して学生ができることを考える貿易ゲームのワークショップを実施するなど、学内のボランティア促進に精力的に取り組んだことが伺えます。



ワークで学ぶ貧困問題
～アナ(た)と世界の状況 don't let it go!～

【2015 年度】 センター長 伊達 浩憲(経済学部教授)

ネパール地震が発生。ネパール出身の本学留学生や有志の学生による募金活動に対して、センターが教職員向けの募金呼びかけの事務局となり、学内他部署などの協力を得ながら取り組みました。

5年目を迎えた東日本大震災復興支援関連については、ボランティアバス2回に加え、2年ぶりにフォーラムを行いました。さらに、国内体験学習プログラムで『福島スタディツアー』(社会学部筒井教授による企画・引率)を開始し、以降、毎年学生が現地訪問やオンラインを通じて復興に向けてのさまざまな取り組みを学んでいます。また、夏期休暇中の瀬田キャンパス恒例行事『夕照コンサート』において、学生スタッフが復興支援活動の展示と模擬店に取り組み、収益はPJへ寄付しています。

その他の学生スタッフの企画においては、瀬田キャンパスで『こどものまちおおつ』や『子どもミュージアム商店街 in 石山商店街』など、子ども向けの地域イベントに参加するボランティア企画を学生スタッフが実施。学内でボランティアを募集して多くの龍大生が参加しました。また、深草キャンパスでも2014年度に始めたものを、改善点などを検証しながらより充実した内容で実施しています。



ネパール地震募金活動(大宮)



福島スタディツアー

近年(2016 年度～2019 年度)

【2016 年度】 センター長 松永 敬子(経営学部教授)

2016年度が始まって間もなく熊本地震が発生。熊本県出身の学生や学生スタッフが中心となって『熊本地震に対する募金活動学生有志の会』を結成し、センターが学内の支援窓口として協力しました。また、学内で『熊本地震ボランティアガイダンス』を実施した際は、両キャンパス合わせて約100名もの参加者がありました。これらを踏まえ、例年実施していた東日本大震災復興支援ボランティアを1回にし、熊本県阿蘇市で復興支援活動を2回実施することになりました。各回30名の学生が参加し、その後の活動報告会にも多くの参加者があったことは、災害ボランティアに対する本学学生の関心の高さが伺えます。

学生スタッフのボランティア企画においては、深草で動物愛護に関する写真展『小さな命のモノガタリ知らない表情がここにあるー』を学内で開催。瀬田では2015年度から引き続いて大津のまちづくりイベントに参加したり、障がい者スポーツへ参加する『Enjoy! スポーツボランティア』、ボランティア体験とワークショップを組み合わせた『笑顔の向こう側～子どもの貧困×ボランティア～』などを実施しています。



熊本地震復興支援活動



Enjoy! スポーツボランティア

第2章 ボランティア・NPO 活動センターの設立から現在に至るまで

【2017 年度】 センター長 阪口 春彦 (短期大学部教授)

『国内体験学習プログラム』においては、2015 年度から始まった福島スタディツアーに加えて、CD による企画・引率のスタディツアーが始まり、2017 年度と2018 年度は滋賀県高島市でのプログラムを実施しました。

また、学生スタッフの活動では継続企画の他に、深草ではセンターの認知度向上や利用方法を知ってもらい、ボランティア促進につなげる『アタックボラセン』を、それまでの日常活動から企画として全員で取り組んだり、障がいの有無と共生について考えるワークショップ『生きるばくら〜ボランティアから共生を見つめる〜』を実施。瀬田では学生部から譲り受けた忘れ物傘を突然の雨の際に貸出し、センターの広報に繋げる学生スタッフ企画『リユース傘貸出しプロジェクト』を開始したり、ボランティアについての意識調査をキャンパス内で実施したりしました。そして年度末には、深草のセンターが 7 号館に移転しています。



アタックボラセン

【2018 年度】 センター長 阪口 春彦 (短期大学部教授)

6 月に発生した大阪北部地震では、発災直後から被災状況やボランティアに関する情報収集に取り組み、ボランティア活動を希望する学生・教職員に対し、活動に関する情報提供と活動の際に必要なグッズの貸し出しを実施しました。また、翌月に発生した平成 30 年 7 月豪雨においては、前述の取り組みの他、東日本大震災や熊本地震と同様のボランティアバスを 8 月に運行。岡山県倉敷市真備町で、15 名の学生と 4 名の教職員が復興支援活動を行いました。その後台風 21 号や北海道胆振東部地震など、多くの災害が起こった年でした。

学生スタッフの活動では、継続企画の他に、東日本大震災復興支援ボランティアに参加した深草学生スタッフによるワークショップ『私たちからあなたに伝えたい 3.11 〜あの震災を過去で終わらせない〜』を実施したり、瀬田では『子ども食堂を知ろう!〜大学生だからできること〜』などの学内啓発企画や収集ボランティアの企画を行っています。



平成 30 年 7 月豪雨真備町復興支援活動



私たちからあなたに伝えたい 3.11

【2019 年度】 センター長 筒井 のり子 (社会学部教授)

この年も台風や豪雨による災害に見舞われました。センター事務局では例年の東日本大震災復興支援活動の他、京都市災害ボランティアセンターのボランティアバスの情報提供や、復興支援に赴く学生に長靴やゴーグルなどを貸し出しました。学生スタッフは龍谷祭の展示で「令和元年台風 19 号災害」の募金箱を設置するとともに、模擬店で出た利益の一部を合わせて中央共同募金会へ寄付しています。

一方、学生スタッフによるボランティア企画では、先輩から引き継いでいる企画は安定して実施しているものの、新たなものに取り組むことが見られない年となった点が課題でした。

年が明けてからは新型コロナウイルスが世界的に感染拡大し、センター事業にもいくつか影響が出ています。3 月に実施予定だった『海外体験学習プログラム』のアメリカとインドのツアーは中止となった他、学生スタッフの活動においても、ボランティア企画の『防災・減災そなえパークへの出展』はイベント自体が中止となったり、『春合宿』も中止となりました。

そして、卒業式と新年度の入学式や新歓活動も中止が決定となった中、深草のセンターは文化系サークル活動等の新たな拠点である『成就館』1F に移転。その直後、大学の決定により「課外活動の全面中止」および「原則学生の入構禁止」となったキャンパスで、新たなスタートを切ることになります。



令和元年台風 19 号災害募金を中央共同募金会へ寄付



深草キャンパスのセンター (成就館 1F)

【第 1 学期 (前期)】

本学危機対策本部で新型コロナウイルス感染拡大防止にかかるさまざまな協議がなされ、2020 年度第 1 学期の全授業をオンラインで実施することが決定。大学の行動指針を「レベル 4」として、教職員においても感染拡大防止の観点から必要に応じて在宅勤務が導入されるなど、急速にオンライン化が進んでいくことになります。

学生スタッフとのミーティングもオンラインで進めながら、センターとして「今できること」を検討し、まずは広報ツールを使った情報発信、そしてオンラインでできることを模索していきました。リモートツールの操作や進行、意見交換の手法など、対面活動では考える必要のなかったことも学生スタッフと共に手探りで進めていく中で、参加学生の「誰かと話したかった」「大学生らしいことをしたい」などの声を拾うことができ、具体的な事業に繋がっていきました。

大学の指針が「レベル 3」「レベル 2」と移行してからも殆どの学生は入構禁止で、課外活動についても一定の制限がかかった状態が続きます。そんな中、7 月には課員として専任職員 1 名が配属され、他部署との調整や連携がよりスムーズに行える体制になりました。

【夏期休暇中】

深草では第 1 学期定期試験の終了に伴い学生スタッフが少しずつ入構し始め、20 周年事業での現役学生スタッフ企画のパートや後期の対面ガイダンスなど、学生スタッフ活動全般について考え始めます。瀬田でもオンラインで定期的に話し合われていくようになり、第 2 学期に向けてのウォーミングアップが進んでいきました。センター事業としては、オンラインの講座を 3 本実施。第 1 学期から引き続いて Youtube を活用したオンデマンド視聴のための動画化がさらに進みます。

一方で、第 2 学期から対面授業が一部再開するという大学の決定を受け、学生入構に向けてセンターでも入退室記録や検温の徹底を制度化したり、対面対応のために大学から支給されたアクリル板を設置したりしました。学生スタッフも徐々に出入りして利用者を迎え入れる準備の他、ミーティングもオンラインあるいはハイブリッドで実施するなど、感染防止対策を講じて活動しました。

【第 2 学期 (後期)】

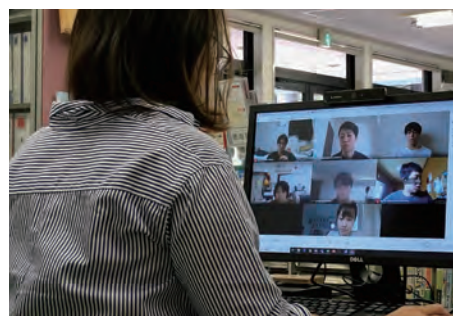
一部の授業が対面で始まったことで、両キャンパスとも少しずつキャンパスに賑わいが戻ってきました。センターも来室者対応が始まり、新歓ガイダンスやボランティア体験のため学生が出入りし始めます。新スタッフも一定数集まり、11 月初旬に全てのボランティア体験が無事終了しました。

その後は、瀬田の学生スタッフを中心に、3.11 をゴールに Twitter で情報発信していく『みんなの防災意識高め隊』や、2020 年度の実施が見送られた大津祭について 2021 年度参加してもらうための『大津祭展示』など、学生スタッフ企画も形を変えながら徐々に動き出します。さらに、オンライン開催する 2 月の周年事業に向けて、職員も学生スタッフもその準備に取り掛かり、ようやく例年のような雰囲気を感じられるようになりました。

2019 年度に新たな取り組みが見られなかった学生スタッフによるボランティア企画についても、深草の学生スタッフの個人的なボランティア活動で、今までにない形にチャレンジしています。



Twitter での情報発信企画



オンライン新歓ガイダンス



入門講座 I でのボランティア体験動画



開室準備の様子



防護服作りの様子

【2020 年度の取り組み 一覧】

取組名称	内 容	実施時期	参加数等
ボラセンついーと大作戦～ボラセンスタッフ's stay home life～	学生スタッフとCD が、ボランティアについてのエトセトラや学生スタッフ作のさまざまな広報動画を発信。また、学生スタッフのアイデアで Twitter 質問箱も設置し、「何か始めたい」と感じている新入生などが気軽に質問できるシステムも構築。	4/1～3/17 ※以降も継続	485 ツイート 発信
オンライン新歓ガイダンス (Zoom)	学生スタッフの提案で、例年であれば対面で行っていた新歓ガイダンスをオンラインで実施。	深草・瀬田合同: 6/17～19 まで計 5 回	14 名参加
		瀬田: 7/9～14 まで計 4 回	10 名参加
ボランティア入門講座 プレ企画 (Zoom)	センター事業の紹介をしつつ、実際の講座申込に繋げることを目指して実施。学生スタッフの協力のもと、センター事業に参加した体験談を動画化してパワーポイント内容に組み込むなど、視聴者が飽きないような工夫を凝らす。	7/14～22 まで計 4 回	61 名参加
ボランティア入門講座	講座Ⅰ (Zoom): CD がボランティアの基礎的な事柄をレクチャー。プレ企画に引き続き、学生スタッフの協力でボランティア体験談動画を入れる。	8/5・6 の計 2 回 +オンデマンド配信	98 名参加
	講座Ⅱ (Zoom): 実際に市民活動の現場で関わっておられる方を講師に事例などをお話いただく。	8/24 +オンデマンド配信	
	ボランティア体験: 7 つの活動先 (オンライン活動やセンター内の活動を含む) に分かれて実施。	10/24～11/7 の間に 計 8 回	48 名参加
サークル活動・ボランティア活動情報交換会 (Zoom)	本学サークルと当センターそれぞれの活動内容の情報交換を通じて、学内のサークル・同好会等の活動を支援したり、ボランティア活動への参加促進につなげる。	9/2 (各キャンパス) 11/19 (合同) 1/13 (合同)	のべ 7サークル 参加
オンライン雑談会 (Zoom)	深草の学生スタッフ新歓活動の一環として実施。	9/8	3 名参加
ボランティアリーダー 養成講座 (Zoom)	『ピンチをチャンスに!柔軟な発想を生み出すスキルを学ぶ』をテーマに、ワークショップ形式で実施。 講師: 九州大学大学院統合新領域学府客員准教授 加留部貴行氏	9/14	32 名受講
ボランティアコーディネーション力 3 級検定	例年、本学学生以外の一般枠申し込みも受け付けていたが、本学学生に限って実施。密を避けるために広めの教室でアクリル板の設置や換気など、感染防止対策を講じて開催。	12/19	28 名受験
龍谷大学東日本大震災復興支援フォーラム 発災から 10 年 (Zoom)	『あらためて震災を振り返り、その経験を「知恵」とする』をテーマに、本学のこれまでの取り組みや活動参加者からの報告、語り部活動や災害支援に携わる方からのお話、学生が作成した動画などで構成。	2/6	申込数 269 名/ 最大視聴者数 205 名/ 見逃し配信 248 回再生
ボランティア・NPO 活動 センター 20 周年記念 事業 (Zoom)	『ボランティアで未来を拓く』をテーマに、ボランティア・NPO 活動センターの 20 年の取り組み報告や学生スタッフ経験者へのアンケート分析、現役学生スタッフによる企画、ボランティアについての学長対談などで構成。	2/11	申 込 数 290 名/最大視聴 者数 181 名/ 見逃し配信 145 回再生
近江八幡の左義長祭 ～コロナ禍において伝統文 化の継承について考える～	新型コロナウイルス感染症が地域に及ぼした影響や、それを受けての取組みなどに焦点を当て、持続可能なまちづくりを考えることを目的とし、日帰りにて実施。事後学習はオンラインでおこなった。	現地訪問: 3/3 事後学習: 3/12 (Zoom)	10 名参加
つながる福島・ ワークショップ	従来実施してきた福島を訪問して学ぶ代わりに、学内で過去の福島スタディツアーを振り返ったり、訪問先の 1 つとオンラインでつないでお話を伺ったりした後、改めて感じたことなどを意見交換。	3/5	14 名参加
オンライン 海外スタディツアー (Zoom)	今まで、当センターで実施してきた海外体験学習プログラム学外企画で学生を受け入れていただいていた NGO 団体の協力のもと、その活動地であるフィリピン、タイからの中継を交えてオンライン (Zoom) で 2 日間実施。	フィリピン: 3/9 タイ: 3/15	3/9 30 名 参加 3/15 25 名 参加

※その他、学生スタッフ企画においても、ボランティア啓発は情報発信を中心に、自分たちの組織運営はオンラインワークにするなど、形を変えて取り組んだ。